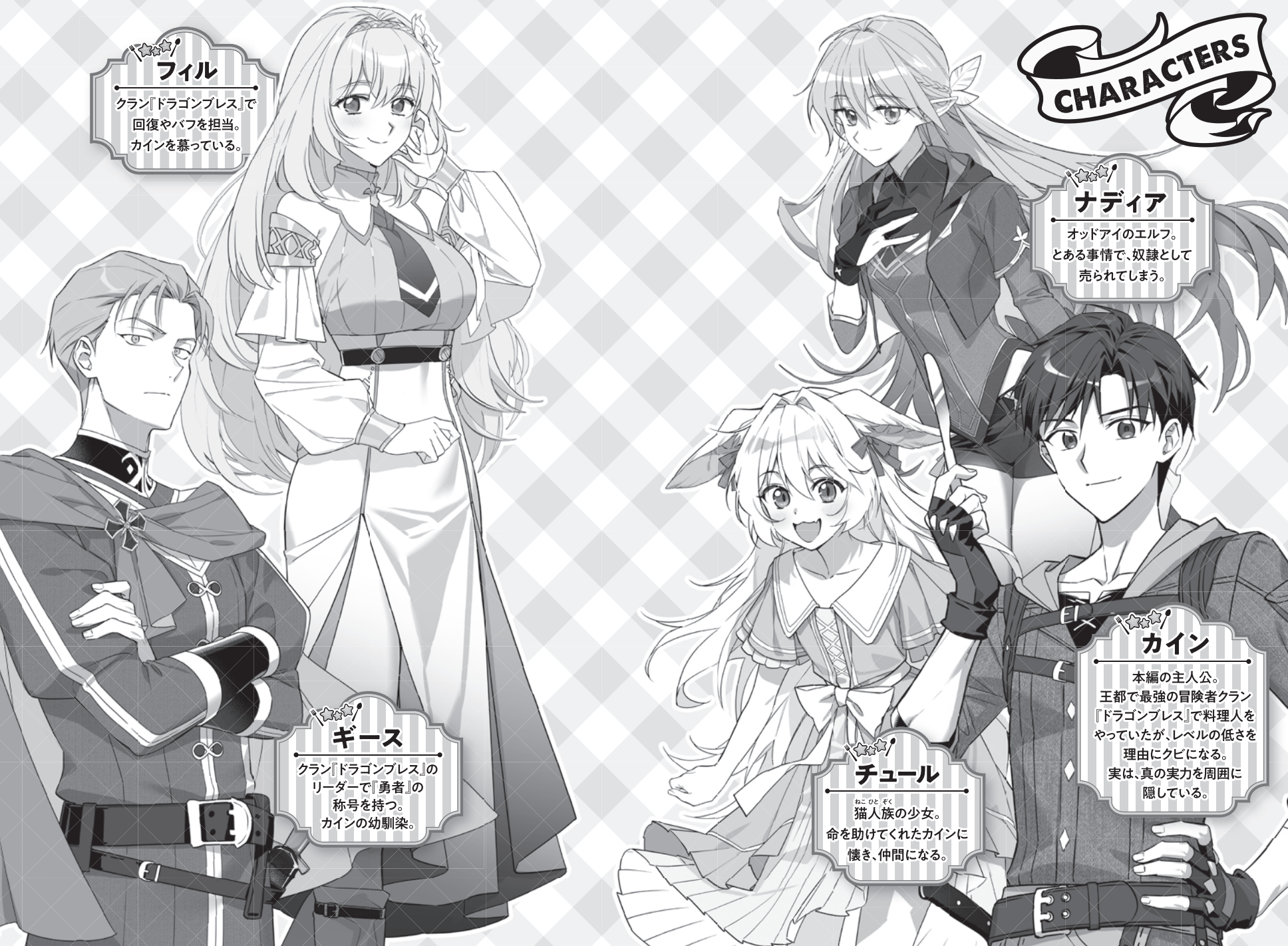
美味いだろ？

・クランを追放された最強料理人の異世界ぶらり旅・

著 TB（ティービー）
ill. 満水

CHARACTERS



フィル

クラン『ドラゴンブレス』で
回復やバフを担当。
カインを慕っている。

ギース

クラン『ドラゴンブレス』の
リーダーで『勇者』の
称号を持つ。
カインの幼馴染。

ナディア

オッドアイのエルフ。
とある事情で、奴隷として
売られてしまう。

カイン

本編の主人公。
王都で最強の冒険者クラン
『ドラゴンブレス』で料理人を
やっていたが、レベルの低さを
理由にクビになる。
実は、真の実力を周囲に
隠している。

チュール

猫人族（ねこびとぞく）の少女。
命を助けてくれたカインに
懐き、仲間になる。

第一話　料理人カイン

俺――料理人のカインは、干し肉と山菜の雑炊とスプーンを女の子に差し出した。おずおずと受け取った彼女はそっと一口食べた。

「どうだ、美味いだろ？」

「うん……」

俺の前にいるのは、見た目が十歳くらいの女の子だ。俺たちは今、丘の上にいる。

彼女は首に鋼鉄の隷属の魔導具をはめられていた。奴隷として売られるところだったんだろうな。

頭には猫耳が生えている。折れ耳で可愛らしい。

猫人族の女の子は奴隷市場でも人気だしな。

そもそも、亜人は扱いがよくない。

見かけた亜人をさらって奴隷にするなんていう行為さえ、責め立てる者は少ない。

この子のような獣人やエルフと呼ばれる森人、それとドワーフと呼ばれる窟人も同様だ。

彼らも辛い思いをしてるだろうな……

俺は、彼らが優れた種族だと知っているから、人間と同じように扱うけどな。

むしろ人間の方が屑が多いことも、よく知っている……
なぜその女の子と一緒に飯を食ってるのかって？
奴隷として買ったのか？　いや、そんな金はないよ。
他人の奴隷をさらったのか？　冗談……そういったことをして捕まれば死罪だぜ。

運がよかったのか、悪かったのか、俺が通りかかったこの山の中を通る街道で、奴隷商人の乗った馬車が山賊に襲われていた。
そのとき、俺は所属していた冒険者のクランをクビになり、一人で王都から故郷へ帰る旅の途中だった。
タイミングがちょっと早けりゃ、襲われてたのは俺だったかもな。
奴隷商人と山賊じゃどっちもどっち、関わらない方が賢い。
そう思ったが、かといってこの山の中で街道を外れて歩けば、簡単に魔物に襲われるだろう。
こいつはちょっと騒ぎが収まるまで、距離を取って飯でも食っておくか。
そんな風に考えて、俺は状況がギリギリ見える丘の上で竈を組んで飯を作ることにした。
干し肉と、このあたりで採った山菜とキノコを米と炊き込む雑炊だ。
干し肉は、ミノタウロスのスネで、そのまま焼いても筋っぽいばかりで食べにくい。
しかし、特製の調味料に漬け込んだあとに干してから、じっくり水で煮出すと、とてもいい出汁



が出るんだ。
おまけに、トロトロになって食感もよくなる。
この調理法を知ってるやつは少ないと思うぜ。
俺は自分で見つけ出したがな！
そこに、山菜とキノコを加える。
山菜が煮えてから、これも携帯食用に一度蒸してから干しておいた米を加える。
こうすることで調理時間も節約できるし便利なんだぜ。
米がいい感じで戻ればでき上がりだ。
スネの干し肉とキノコから出た極上スープを米がしっかりと吸い込んで美味そうだ。
そろそろ、山賊どもの争いは終わったかな？
俺は、争っていた方に目をやる。
すると、思わぬ展開になっていた。
双方が八人ずつほどで争っていたのだが、血の匂いに誘われたらしきウルフ系の魔物の群れが彼らに襲いかかっていた。
あいつらは……グレーウルフに、統率役のレッドウルフまでいやがる。
戦いで傷ついた状態の山賊どもでは無理だな。
ああ、奴隷商人の方は全滅か。

馬車も倒されて……ヤバイ、罪もない（あるかもしれないが）奴隷たちまで、狼の魔物に襲われはじめた。
こいつはしょうがないな。
奴隷商人や山賊が死ぬのは自業自得だが、奴隷たちが死ぬのは可哀そうだ。
距離があるから間に合うかどうかは微妙だが……
美味しそうな湯気を立てる雑炊は、ちょっと後回しだ。
俺は狼たちに向かって駆け出した。
腰に差したステーキナイフとフォークは十二本ずつ。
あとは、捌き包丁が一本。
これが俺の武器の全てだ。
まあ、この程度の相手ならな。
狼まで五十メートルほどの距離に近づくと、ステーキナイフを両手に五本ずつ持ち、一気に投げた。
それぞれのナイフは、確実に眉間に突き刺さり、その命を刈り取る。
ナイフはあとで洗って、消毒もするから安心してほしい。
奴隷商人の馬車に近寄るが、奴隷は手足を拘束されたまま馬車が倒されてしまっていて、逃げることもできずに狼に殺された者が五人いた。
「間に合わなかったか。スマンな」

馬車の中には、奴隷を売るときに着せる洋服程度しかない。
それでも、いくばくかの金にはなるので、「収納」と呟きながら俺の魔法の鞄に収納していく。
ちなみに、魔法の鞄の容量は、持ち主の魔力量に比例する。それと、生きものは入れられない。
そのとき、馬車の中で何かが動いた。
おっと、狼を取り逃していたか？
腰の捌き包丁を右手で逆手に構えた。
「待って、殺さないで」
女の声だった。いや、女の子だな。
声の聞こえた場所にあった布をめくると、猫耳を生やした女の子が現れた。
猫人族は体が柔らかく身体能力も高いから、馬車が倒れた衝撃からも逃れて、狼の襲撃も受けずに済んだんだろうな。
だが、手足は縛られた状態で、隷属の首輪もはまったままだ。
奴隷商人側は護衛も含めて八人全員が死んでいた。
山賊側は、六人分の死体しかない。
奴隷商人の金品は、山賊の生き残りが持って逃げたのか……
このまま死体をここに置いていたら、どんどん魔物が集まってくる。そこで、狼の死体と、山賊と奴隷商人の死体を集めると、馬車に放り込み、生活魔法の『着火』で火をつけた。

そして、猫人族の女の子一人が残ったわけだが、盛大に腹の虫を鳴かせていた。
「腹が減ったのか？」
「うん」
「名前は？」
「ない」
「ない、って名前なのか？」
「違う、名前がないの」
「親は？」
「殺された」
「親に貰った名前は？」
そう聞くと、首輪を指さした。
あーそういうことか。
隷属の首輪の制約で、本名を名乗れないようになってるんだな。
奴隷商人はよくそういうことをやるらしい。本当に糞な魔導具だ。
「首輪の鍵は？」
「奴隷商が持ってた」
ありゃ……勢いよく燃えてっから、消えるまで取り出せないな。

「まあしょうがない。飯でも食って、消えるのを待とう」

そういうわけで、今この女の子に雑炊を食わせている。

「火が消えたら、鍵を探してやる。鍵が見つかればお前は自由だ。好きに生きろ」

「おじさんの名前は何？」

「おいおい、俺はまだ三十前だ。お兄さんって呼べ」

「わかった、おじさん。名前は？」

「……カインお兄さんだ」

飯を食い終わって、馬車の方を見ると、火はほとんど消えかかっていた。

まだこの状態じゃ死体は骨にまではなってないだろうが、鍵を探さなきゃならないし、しょうがないな。

「どうする？　死体は見たくないだろ？　ここで待ってるか？」

「イヤ、一人は怖いから、カインと一緒に行く」

「じゃあ、ついてこい」

俺は猫耳少女を連れて馬車へ戻った。

生活魔法の『給水』で、馬車の上から水をかける。

ジュワァアアアと音がして、水蒸気が立ち込める。

意外に勢いよく燃えてたようで、既に死体は骨になっていた。

生焼けの状態の死体を見るよりはよかったな。

隷属の首輪の鍵を探すが、見当たらない。

「ありゃ、鍵がないな。もしかして、魔法の鞄の中とかに入れてたか、鍵？」

そう猫耳少女に聞くと頷いた。

少し顔が引きつってる。

まあ、白骨死体がたくさん並んでるのを見れば、顔も引きつるよな。

「どうやら、山賊の生き残りが魔法の鞄を奪って逃げたようだな。魔導具は火で焼いたくらいじゃなくならないから、間違いないだろう」

このままじゃ、この猫耳少女が困るだろうし、鍵を取り返しに行くか。

その前に、こいつらもこのままじゃ気の毒だ。

そう思って、俺は生活魔法の『穴掘り』で地面を掘る。

一度の発動で、直径三メートル、深さ五メートルほどの穴を掘り、生活魔法の『送風』で馬車をその穴へ吹き飛ばす。

それを見ていた猫耳少女の顔が、さらに引きつっていた。

そして、俺はもう一度生活魔法で穴を埋めた。

「カイン、生活魔法ってそんなのじゃないと思う」

「なんでだ？　俺は魔法は生活魔法しか使えないから、間違いなくこれは生活魔法だ」
「うーん……まあいいよ」
馬車を埋め終えると、俺たちは山賊が逃げていった方へやつらを追いかけた。
怪我をしているようで、結構な量の血痕が点々と続いている。それは森に向かっていた。
これなら見つけ出すのは難しくないな。
そこから二十分ほど血痕を追って森を歩いていくと、洞窟を見つけた。
慎重に奥の様子を観察する。
洞窟の奥で、影が揺れて見える。
中に人がいて、篝火を燃やしているのだろう。
猫耳少女には入り口で待機してもらうことにし、俺は腰のステーキナイフを構え、隠密スキルを発動しながら奥へ向かった。すると声が聞こえてきたので、俺は様子を窺ってみる。
「お頭ぁ。仲間は死んじまったけど、結構な額の収入でしたね」
「まあ、仲間はまた集めればいいだけだ。また奴隷商人を見つけたら、その奴隷を奪って仲間の代わりにしてもいいしな。その方が分け前を支払わなくて済むし、肉壁としても使いやすい」
「しかし、あの狼どものせいで、ひでえ怪我しちまった。ポーションがなけりゃ死んじまってましたよ」
「今日はゆっくり休め。明日は仲間を探しに街に行くぞ」

「わかりやした」
どうやら奥にいるのは二人だけのようだ。
これなら大したことはない。
たとえ山賊であっても、俺に何かしたわけじゃないし、鍵さえ譲ってくれるなら放っておいても構わないんだがな。
俺は彼らの前に姿を現した。
「おい、山賊。奴隷商人から奪ったバッグの中に鍵があるだろ。それを寄越せ」
「な、なにもんだ、きさま」
年長らしき方――お頭か？　が言った。
「通りすがりの料理人だよ」
「通りすがりでこの洞窟を見つけるわけないだろうが。お前は一人か」
「ああ。一人だ」
すると、山賊の子分の方が黙って剣を構えた。
へえ。こいつらって、意外に統率取れてるんだな。
そう思いながら、俺は子分の方にステーキナイフを投げた。
「ぺゲェ」
ステーキナイフは、剣を握っていた子分の右腕に突き刺さる。

「俺は食えないものは殺したくないんだけどな？」
山賊のお頭が、慌てたように口を開いた。
「ま、待て。今のはこいつが勝手にやっただけだ。そいつはどう扱っても構わねえ。俺だけは見逃せ。そ、そうだ仲間になれば稼ぎは折半だぞ。さらった女も抱き放題だ。楽しいぞ、山賊は」
「お前、人の話を聞いてたのか？　食えないものを殺す趣味はないと言っただろ？　山賊なんてまっぴらごめんだ」
そのとき、お頭は俺に向かって、砂が入った目つぶし玉を投げつけてきた。
俺は素早く背中に下げた鍋の蓋を構えて、目つぶし玉をはじき返す。
ついでに、生活魔法の『送風』であたりに散らばった砂も全部、お頭に飛ばしてやった。
お頭は、自分が投げた目つぶし玉で視界をなくしている。
「気持ちいいほど屑だな。食えないものを殺す趣味はないが、攻撃されるなら話は別だ。ちょっと俺の目的のものを見つけるまで穴にでも入ってろ」
生活魔法の『穴掘り』で五メートルの深さの穴を掘り、お頭と子分を放り込んだ。
「自分で出られるなら助けてやる。出られなきゃ飢え死にするだけだ。せいぜい頑張れ。ここにある荷物は俺に攻撃しようとした慰謝料代わりに貰っていってやる。大事に使ってやるからありがたく思え」
俺は、あたりに溜め込んでいたお宝を魔法の鞄に放り込み、篝火の火に水をかけると、猫耳少女の待つ入口へ戻った。
「この魔法の鞄は、お前を連れていた奴隷商人のものか？」
「うん」
中身を出すと、鍵束も入っていた。
他にも、例えば未使用の隷属の首輪が二十個ほど入ってる。売ればいい値段になるな。俺には必要ないし。
だがまあ、魔法の鞄に入れてる分には、重さを感じないから、とりあえず入れとくか。
鍵束の鍵を片っ端から猫耳少女の首輪に試すと、無事に隷属の首輪の解除に成功した。
「やっと、外せたな。これでお前は自由だ。どこへでも好きなところに行って自由に生きろ」
「ありがとうカイン。私の名前はチュール。これからよろしくね」
「おい、人の話聞いてたか？　どこへでも好きなところに行って自由に生きろ」
「うん。だからよろしくね、カイン。カインのごはん美味しかった。生まれてから今までで一番美味しかった。だから、カインのそばが一番私のいたいところ。駄目？」
上目遣いでこっちを見る猫耳少女チュールに懐かれたようだ。
猫耳少女チュールと俺は、故郷への道のりを二人で歩いていた。
「そろそろ飯にするぞ」

「うん」
やっと山を下り、今は川に並行した街道にいる。
俺はチュールとともに川原に降りた。
「チュール。薪に使う枯れ枝を集めてこい」
「うん」
「何か食べたいものはあるか？」
「カインの作る料理ならなんでもいい」
「そうか。じゃあちょっと待ってろ」
そう言って俺は、料理の支度を始める。
料理の基本は、食べる人の顔を思い浮かべて作ることだ。
今はチュールが美味しそうに食べる姿を想像しながら手早く準備をする。
そうだな。
俺がかつていたクランで可愛がってたあの黒猫は、魚を喜んでたな。
猫人族のチュールもきっと喜ぶはずだ。
魚か……
「チュール、ちょっとだけ材料を獲ってくるから、薪を集めたらここから離れるなよ」
「うん」

俺は川辺に向かい、手を川に浸す。
なかなか綺麗な水だ。
こんな川に住む魚なら間違いなく美味いな。
俺は、川に浸した手から、生活魔法の『発電』を放った。
一瞬川面が青白く発光すると、あちらこちらで白い腹を見せた魚が浮かんだ。
「あちゃ。ちょっと獲れすぎたか？」
だがまあ大丈夫。
俺は、獲った獲物は責任もって美味しくいただくと決めてるし、そもそも魚たちは痺れているだけだからな。
魔法の鞄から長い柄のついたタモ網を取り出して、見える範囲の浮かんでいる魚をかき集めた。
イワナにヤマメ、アユにフナ、ナマズにウナギ、すっぽんもいるな。
その中で形のいいものだけを選んで、他の魚はそのまま川へ戻す。
すると、電撃で痺れていただけの魚たちはプルプルッと震えたあと、無事に泳ぎはじめる。
「美味しそうに育つまでは、元気に生きろよ！」
そう声をかけておいた。
五十匹ほどの獲物を集めると、自慢の捌き包丁を取り出して、素早く下処理をする。
ほんの十分ほどだ。

俺が下処理をしていたら、チュールが顔を覗かせた。
「すごい。お魚いっぱいー」
今から食べる分を除いて、他の魚は二枚に開いて塩を当て、川原に干しておく。
そして竈を組み、鍋を火にかける。
同時進行で、羽釜を取り出して米も炊く。
野菜は何かないかなと付近を見渡したところ、セリが自生しているのを見つけた。
お、薬草もあるな。
ついでに摘んでおく。
今から食べる六匹の魚に手早く串を打ち、竈の周りにさして遠火の強火で焼き上げる。
火を通しすぎない焼き加減が大事だ。
だけど、皮目には焼き色をつけないといけない。
料理はバランスだからな。
焼きあがった魚を味噌仕立てで仕上げたスープに放り込み、セリも加えて一煮立ちだ。
羽釜のごはんも炊きあがった。
「さあ、チュール食うぞ」
「うん」
というわけで、俺たちは食べはじめた。

「どうだ？　美味いだろ」
「うん」
チュールの耳と尻尾がぴょこぴょこ揺れている。
気に入ったようで何よりだ。
食べ終わってチュールと二人でお茶を飲んでいると、ガサガサッと大きな音がした。
なんだ？　と音のした方を見れば、熊の魔物がそこにいた。
クレセントベアーだ。
ツキノワグマが魔物化したやつだな。獣の身体に魔素が溜まると、魔物になってしまうのだ。
あろうことか、俺が川原で干していた魚を食ってやがる。
許せねえ。
魔物化したこいつは、身長三メートルほどもあり、瞳が赤い。
その瞳の色が魔物と獣の一番の違いだ。魔物は魔素の影響で瞳が赤く光る。
俺は捌き包丁を構えて、クレセントベアーに立ち向かう。
「俺の魚を食った償いは、てめえの身体で払いな」
俺は刃渡り二十センチほどのミスリル製の捌き包丁を持ち、クレセントベアーの目を見据えつつ、一気に駆け抜けた。
――ドサッ。

二本足で立っていたクレセントベアーの右足の関節を一撃で斬り飛ばす。
クレセントベアーは当然バランスを崩して倒れる。
倒れながらも両腕を振り回して、俺に攻撃しようとしてくる。
次は左手首を斬り飛ばす。
次は、右手首。
その次は左足。
最後に首筋を斬り飛ばして、止めを刺した。
「こいつはでかいから、肉には当分困らないな。掌ははちみつがしみ込んでいて美味いんだよな。夜は掌の煮込みだ」
チュールは俺がクレセントベアーと戦う姿を、目を見開いて見ていた。
「ねえ、カイン。おかしくない？」
「何がだ」
「この熊、かなり強いと思うのに、カインはもっと強い」
「あーそれか。食材を仕入れるのは料理人の仕事だからな」
「普通の料理人は、食材は買うんだと思う」
「俺は、戦闘職じゃないから、稼ぎが悪かったし、買う余裕はなかった」
「……この熊を売れば、一か月は生活できると思うよ？」

「そんなわけあるか。俺は今までクランメンバー二十人の食事を世話してたんだ。こんなの一頭じゃ三日分がいいところだ。売ってもそんなにはならないと思うぞ」
「カイン、そのクランのメンバーって、食費は払わないの？」
「なんでだ？　俺は料理人だ。仲間の食事を俺が用意するのは当たり前だろ？」
「カインはいい人だけど、馬鹿？」
「どこがだ？」
「そのクラン、カインがいなくなって、きっと困ってる」
「そんなわけあるか。俺は役立たずだからクビだって言われて放り出されたんだよ」
「馬鹿だ」
「俺は馬鹿じゃねえ」
「違う。そのクランが」
「そう思うか？」
「うん」
俺がクランをクビになって今日で一週間になる。これまで悔しいと思いながらも、表情に出さないようにして俺は一人で故郷を目指していた。
「なあ、チュール。言ってもしょうがないことなんだが、ちょっとだけ愚痴に付き合ってくれるか？」
「うん。カインの話聞きたい」

俺は幼い猫人族の少女チュールに話を始めた。
「俺はな、王都で最強と言われる冒険者のクラン『ドラゴンブレス』にいたんだ」
「へーすごいじゃない。私でも名前を聞いたことがあるクランだよ」
「そこで俺は、サポート班のリーダーを、クランの結成当時からやっていた」
「うん。カインの実力なら納得だね」
「まあ、クランのトップのギースが同郷の幼馴染だったから、そのおまけみたいなもんだけどな」
「そうなんだ……」
「俺は足手まといにならないように、必死でサポート職を極めるために頑張ったさ。クラン結成前のパーティ単位で動いてたときから、メインの戦闘職の剣士ギース、タンクのハルク、攻撃魔法の使い手ミルキー、回復から補助まで幅広くこなすフィル、そして料理人の俺カインだ。とてもバランスの取れたいいパーティだった」
「強そうだね」
「それだけのメンバーがいたから、順調に依頼をこなしてランクを上げ、Sランクパーティになり、やがてクランを創設したんだ。量より質で徹底的に才能のあるやつらをスカウトしていった。そうして五パーティ二十人の戦闘職と六人のサポート職が集まった今のクラン『ドラゴンブレス』が完成したんだ」
「なんで、カインはクビになったの？」

「レベル差かな。基本はパーティを組んで狩りをするだろ？　パーティの上限は五人とギルドによって決められているから、クランを組んだあたりからの俺はいつもソロだった。料理人に経験値を渡すくらいなら、他の戦闘職を鍛えたいって理由だ。いや、その前からパーティからは外されていたかな。魔物は食材収集と斥候をしてるときに邪魔になったやつ以外は倒さなかったんで、迷惑をかけているしな」
「えー？　そんなのおかしくない？　それじゃあ、元のメンバーの中でカインだけレベルが上がらなくて、みんなと差がついちゃったってこと？」
「……なあ、サポートスキルの仕様は知ってるよな？」
「レベル10を超え、術者と相手のレベル差が倍になったら、バフ系のスキルの恩恵が得られないっていうやつだよね？」
「先月、元のドラゴンブレスのメンバーでSランクダンジョンを踏破したんだが、その最後のボス戦を迎えるときに気づいたんだ。バフは同一パーティでなくてもかけられるだろ？」
「うん」
「俺は普段、フィルのMPを節約するために、バフはなしで行動している。ただ、戦闘に参加しないにしても、さすがにSランクダンジョンのボス部屋に入るんじゃ危ないからって、フィルは俺にバフをかけようとしたんだよ」
「へー、ちゃんと仲間してるじゃん」

「だが……無理だった。俺にはバフが届かなかったんだよ。『ボスと戦うのにバフなしで連れていくことはできない』とギースが俺に告げたよ。俺はそれを受け入れた。そして、ギースの率いるドラゴンブレスはSランクダンジョンのボスを倒した」

俺は一度言葉を切り、チュールを見た。彼女は目を大きく見開いている。俺は軽く微笑むと、話を続けた。

「あのSランクダンジョンを攻略した日は、おかしなことが続いたんだよな。いつものように斥候として雑魚敵をやっつけながら一人で先行していた。そうしたら、俺では気づけなかった転移トラップが発動して、その先で、でっかいトカゲが現れやがってな。そいつはトカゲのくせに人の言葉を喋りやがるんだぜ。気味悪いだろ？　あまりにも気味悪いから、俺はそいつを倒したんだよな。すると、今度は別の転移トラップに一層まで戻されちまった。俺は下層に進んでいるであろうギースたちに追いつくために、必死でダンジョンを駆け抜けたんだ。そうまでして追いついたのに、フィルのバフは受けることができず、ボス戦に参加できなかった」

「ねえ……カイン、ちょっといいかな？」

「どうした、チュール」

「カインのレベルっていくつ？」

「俺は『鑑定』スキルは持ってないし、ギルドで鑑定を受けると金がかかるから、一度も調べたことはないぞ」

「えーとね……ギースやフィルのレベルは知ってる？」

「確か１１０くらいだとか言ってたな」

「本当に……ギースがSランクダンジョンのボスを倒したのかな？」

「ああ、すっげえ宝を大量に持ち帰ってたからな」

「そうなんだ。で？　カインはSランクダンジョンから帰るときにはみんなと一緒に帰ったの？」

「あいつらはボスを倒したら出るボス部屋の脱出魔法陣から戻って、ボス部屋に入ってない俺は一人で歩いて戻ったさ」

「Sランクダンジョンの最下層から？」

「そうだ。おかげで高い魔導具を大量に消費しちまったし、踏んだり蹴ったりだった」

「敵を倒してドロップ品とか集めなかったの？」

「食材集めの必要はなかったから、無駄な戦闘はしないさ」

「それって、カインはSランクダンジョンでもソロで最下層まで辿り着けるってこと？」

「大量の魔導具を消費しながらだぞ？　全然すごくない」

「でも『ドラゴンブレス』の他のメンバーで一人で最下層まで辿り着ける人はいるの？」

「できるんじゃないのか？」

「えーと……今までそのダンジョンをクリアしたクランってたくさんいるの？」

「いや。Sランクのダンジョン踏破は、世界初の快挙だ。だから、メインパーティのギースたち四

人は貴族に叙爵されて、それぞれ称号を与えられた」
「なのに、カインはクビ？」
「あー……ギースは俺を気遣って、『バフを届かせることができないんじゃ、いつかカインを死なせてしまう。そんなのは嫌なんだ』って泣きながら、クビを宣告した。まあ、俺は冒険者ランクDだしな」
「……ウサンクサッ」
チュールが小声で呟くが、俺には聞きとれなかった。
「何か言ったか、チュール？」
「いや、なんでもないよ……」
「だから俺は、故郷に戻って好きな料理を作って人の笑顔が見られる生活をするんだ」
「そっか。カインがそれでいいなら、私もそれでいいよ。ギースって人のおかげで、私はカインに出会えたんだから、私もギースに感謝することにするよ」
チュールはそう言って微笑んだ。
「そういえば、チュールって随分物知りっていうか、話し方とか子供っぽくないけど、いくつなんだ？」
「十四歳だよ？　来年で成人」
「マジかよ……十歳くらいだと思ってたぞ」

「カイン失礼。夕ごはん、超美味しいの作ってくれなきゃ許さない」
「フッ、俺は何があろうと作る飯に手は抜かない。俺が作ればただの卵かけごはんでも、最高のディナーだと言わせてみせるぜ」
「楽しみ」
「まあ、話を聞いてもらったら、だいぶ気が楽になった。ありがとうな、チュール」
俺の今の言葉は本心だ。ただ、言っていないこともある。もしかすると、いつかはそれもチュールに話すかもしれないな……

第二話　ドラゴンブレス①

俺――ギースはついに成し遂げた。
前人未到のSランクダンジョンの踏破、を。
これにより、王宮から使者が訪れた。
「冒険者ギースに勇者の称号を贈り、準男爵へ叙すると内示されましたが、お受けなさいますか？」
「もちろん、お受けいたします。このグリード王国のために我がクラン『ドラゴンブレス』は一層の努力をしていくことを、お約束いたします」

「ドラゴンブレスのメインパーティである五名の方々には多大な功績があると、ギルドマスターから報告を受けております。そこで、ハルク、ミルキー、フィル、そしてカインの四名にも、それぞれ騎士爵への叙爵の内示が出ております」

「お待ちください。カインは今回のダンジョン攻略において、サポートについてはおりましたが、メインパーティのメンバーではありませんでしたし、ボス戦にも不参加でした。資格を有しているとはとても思えません。しかしハルク、ミルキー、フィルの三名に関しては、パーティメンバーでしたし、戦闘においても高い能力を発揮しました。今後も王国のために貢献してくれると思います」

「そうでしたか。それでは叙爵は四名ということで奏上させていただきます」

このとき、俺はふと思いついた。

「使者殿、少しいいですか？」

「なんでしょう？」

「カインが叙爵しない分、私の爵位をもう一段階上げてもらうわけにはいきませんか？」

「それは、前向きに検討いたしましょう」

Sランクダンジョンのボスを討伐してその先にあるダンジョンコアのある部屋の宝箱の中身は、聖剣と聖鎧に、伝説の秘薬と呼ばれるエリクサー、それと時戻しの秘薬だった。

時戻しの秘薬は、一粒飲めば一歳若返るという薬で、王都では一粒一億ゴルの価値で取り引きされている。

俺は使者に、時戻しの秘薬を国王に献上したいと伝える。これで、俺の二段階陞爵もうまくいくだろう。カインには悪いがな。

とはいえ、実際カインはよくやってくれたと思う。

かつては斥候職のいなかった俺たちのパーティで、自腹で魔導具を用意し、偵察から罠解除、荷物運びに本職の調理まで、あらゆるサポートをこなしてくれた。

だがしょせんは低レベル。

今の俺たちのクランには、有能な斥候職が何人もいる。

もちろん、料理を作れるメンバーもいるし、ポーターだって困ってない。

カインを残さなければいけない理由はどこにもない。

俺もカインをちょっと買いかぶっていたのだろう。

フィルのバフも受けつけられないほどのレベル差が存在していたのでは話にならない。

俺は勇者の称号を与えられた男だし、もっと見栄えのいいメンバーを連れているほうがいいに決まってる。

この機会に、クラン内でパーティメンバーの入れ替えを行おう。

俺のパーティは、姫騎士二人にクノイチ一人、見栄えの優れた女サポーターがいい。

そもそも、俺はもう貴族なんだから、ダンジョン探索なんてやる必要はないからな。

見栄えのいい女を連れて歩くだけで十分だ。

そうなると……クランの活動は、ハルクとミルキーとフィルの三人をそれぞれパーティのリーダーにして、クラン内でメンバーを入れ替えながら狩りをさせよう。

しかし、あのSランクダンジョンは思ったよりしょぼかったよな。

Sランクダンジョンに限らず、俺たちが今まで攻略してきたダンジョンは、大抵どこのダンジョンも罠もないし敵も少ない。苦戦するような敵が現れたこともない。

他のパーティやクランが苦戦して怪我をしたり、依頼に失敗したりという話をよく耳にするが、なぜそんなことになるのか全く意味がわからない。

冒険者なんてちょろい商売だ。

これからは冒険者活動はそこそこにして、もっと政治というものを学ばなきゃな。

◇◆◇◆

ギースが俺――ハルクに王宮の使者の言葉を伝えた。

俺が貴族様かよ。

農家の四男の俺がだ。

畑と牧場しかない田舎から王都に来て早十二年。

田舎の親父やお袋に伝えてやれば喜ぶかな？

俺たちなりに頑張ってきたという自負はあるが、俺はギースほど楽観視してない。

他のAランク以上のパーティとはよく酒場で会い、そこそこ会話もする。

ギースの野郎は、女の尻と胸しか見てないから、他のパーティと話なんかしないけどな。

酒場で仕入れる情報は、主に攻略予定のダンジョン情報だが、おかしなことがある。

俺たちがダンジョン探索を始めたのは、パーティとしてCランクに上がった頃からだ。五年ほど前になるかな？

ギースが能天気な分、俺は情報集めには時間をかけていた。

Aランク以上のパーティのダンジョン探索の話は、俺たちが実際にダンジョンで感じる難易度よりも数段難しい印象があった。

そもそも、俺たちはダンジョンで罠にかかったことなどないしな。

敵だって聞いてたより全然少ない。中ボスなんて、五層おきに現れるなんていうけど、俺たちが中ボスと戦ったのは、ダンジョンに行きはじめてから五年経った今までに五回もあったかな？

確率の問題なのかもしれないが、それにしても他のパーティのやつらはみんな大げさだ。

ただ……どのパーティに聞いても、誇張の具合まで同じなのが気になるけどな。

ギースはこれから先はあまり最前線に立つ気がないようだ。

俺は体が動くうちは冒険者で頑張りたい。

それにしても、カインをクビにする必要はあったのか？

確かに、バフの効果を受けられないのは問題だ。
だが、そのことを理由にクビにする必要はあったのか？
あいつは今までよく頑張ってくれていた。
あいつの料理のおかげで、どれだけ気持ち的に助かったことか。
まあ、今はサポート要員も充実してきているし、カインが後輩の面倒を見て育てていたから、あいつが抜けてもサポート業務に問題はないと思う。
だが、カインに対しても文句がないわけでもない。
あいつが、サポート職は簡単なもんだと思わせたせいで、ギースやミルキーはサポート職を下に見て、戦闘職よりも取り分を少なく設定している。
これじゃあ、有能なサポーターは育たない。それに、カインは料理人なのに一人でやっていたが、ダンジョンでの斥候は本来戦闘職だからな？
そこだけは、カインの責任だぞ？
なんにせよ、俺も次からはパーティリーダーとして活動する以上は、ギースの言いなりじゃない、まともなパーティを育てたいと思う。
大事なのは、美味い飯を作ってくれる、サポーターの存在だよな？

◇◆◇◆

私――ミルキーたちのクランは、とうとうこの国でナンバー1と言われるようになった。
全ての始まりは、十二年前にこの王都のギルドで、ギースとカインの二人組と出会ったことだった。
田舎の農村から出てきたばかりだったギースたちとは、ギルドの新人研修で出会った。
他にも、ハルクというやたらガタイのいい男の子や、フィルという回復魔法を使う女の子と、この新人研修で一緒になった。
年齢は、ギースとカインはちょっとお兄さんで、そのときで十七歳だったかな？
ハルクが十五歳、私が十三歳、そしてフィルが十二歳だった。
新人研修の講師でもあったギルドマスターの勧めで、そのままパーティを組んでみることになった。
偶然、鑑定してもらった適性職業のバランスもよかったし……何よりも、それぞれのメンバーに才能があったと思う。
微妙なのは、『料理人』のカインだった。
カインは、私たちが一緒にいる場所では戦闘をしない。
ただ冒険についてきて、パーティの経験値を掠め取るような存在だった。
だから私は、ギースに言った。
「カインって戦闘しないんだから、パーティに入れてる必要ないんじゃないの？」

「まあ待てよ、ミルキー。カインがいないと自分で荷物を持ったり、料理を作ったりしなくちゃならないんだから。そんなの嫌だろ？」

「まあそうだけど。でも戦闘しないんだし、一緒に来るのは構わないけど、経験値を分けるのが納得いかない」

私がそれでも食い下がったら、カインはあっさり「別にいいよ？」と言って、パーティと一緒に行動はするけど、パーティメンバーには入れないことになった。

それから私たちは順調に冒険者としての経験を積み、ついにはクランを立ち上げることになった。

このクランという制度は、冒険者の生活を安定させるんだよね。

クランメンバーの冒険者活動で得た収入は、全てクランに対して支払われる。

それってメンバーにとって損なんじゃない？　って思われるかもしれないけど、冒険者は常に安定した収入があるわけじゃない。怪我をしたり依頼に失敗したりすることもある。安定しない職業ではナンバー1だ。

でも、クランに所属していれば、基本的に毎月決まった額がクランから給料として支払われるし、探索に必要なポーションや魔導具、武器はクランが支給してくれる。

高額なドロップ品を納品したときには、ちゃんとボーナスも出る。

しかも、私たちのようなランクの高いクランには、普通は受けられないような割のいい依頼も、ギルドから優先的に回ってくる。

だから、私たちのクラン『ドラゴンブレス』には入隊希望者が後を絶たない。

給料だって、実力に応じてきちんと評価してもらえるしね。

まあほとんど、私とギースが決めてるけど。

ギースは月に金貨五十枚――五百万ゴル。

私やハルク、フィルは金貨三十枚。

他の、パーティのリーダークラスで金貨十五枚。

戦闘職のメンバーで金貨十枚。

サポート職のメンバーで、パーティメンバーとして活動すれば金貨五枚。

パーティ外での補助だと、金貨一枚が基準ね。

みんなパーティメンバーになるために、必死でスキルアップする。

カインはパーティ外での活動だけど、一応サポート部隊のリーダーってことにしてあげてるから、金貨一枚と銀貨五枚。

普通の街の人たちが一月働いて得られる収入は、金貨一枚になるかならないかだから、悪くはないでしょ？

探索に必要な魔導具は、クランが用意するんだしね。

それにしても、カインのやつって、魔導具の消費が多かったのよね。

カインは魔導具の購入費だけで月に金貨五枚分は使っているから、あいつはきっとクランの資金

で買った魔導具を横流しとかしてるのかもしれない。証拠を掴んだら絶対許さないからね。
以前からずっとそう思ってたけど、ギースはとうとう決断してくれた。
冒険者ランクDのカインをやっとクビにしてくれた。
これで私の中のモヤモヤした感情は落ち着くかな？
と考えていたのに……
なんで私たちのパーティはバラバラになるの？
メインパーティのメンバーがそれぞれリーダーになり、切磋琢磨しながらさらにドラゴンブレスの名声を高めるためだと、ギースは言った。
でも……ギース。あんた、もうダンジョンに潜る気ないでしょ？
クランのメンバーの中でも実力が上位とは言えないけど、見た目だけは優れた女ばかりを集めてギースのパーティメンバーにしてるし、やたら華美な防具や武器を身につけさせてるし。斥候職のクノイチのアンナは、めちゃ煌びやかな装備をクランの資金で買い揃えていた。
斥候が目立ってどうするの？
サポートに選んだスーザンも、職業は美容師だよ？　ダンジョンで美容ってなんの役に立つの？
「俺のこれからのメインの仕事は、よりランクの高い仕事を取ってくることだ。そのために必要なのは社交界での貴族たちとの交渉であって、剣の腕ではない。今回手に入れた聖剣『ゼクスカリバーン』と聖鎧『ホーリークロス』を身につけ、白銀の装備で統一した俺の新たなパーティ、俺たちが社交界を歩くだけで、高位貴族たちが近寄ってくるからな。なにしろ俺はこの国で唯一『勇者』の称号を持つ男だから」
言ってることはわからないでもないけど、私たちが育ててきたドラゴンブレスはどうなるのかな？

◇◆◇◆

私——フィルだけは知っている。
カイン兄ちゃんの本当の実力。
でも……カイン兄ちゃんは、私が誰かに言おうとすると、唇に指を当ててウインクする。
カイン兄ちゃんの実力に気づいたのは、パーティを組んで間もない頃だった。
私は確かに、優れたスキルを持っていた。
回復魔法を使えて、仲間の能力を伸ばすバフスキルも使える。
聖魔法を弓に纏わせて、光の矢を打ち出すこともできる。
とても恵まれており、将来を期待された。
でも、私には欠点があった。
魔力がとても少ない。

優れたスキルを身につけていても、魔力がなければ使えない。
私は実は……役立たずだった。
「どうしたフィル。魔力切れか？」
そう声をかけたカイン兄ちゃんが、私におにぎりを差し出した。
「これを食って頑張れ」
頑張りたいけど、魔力がないと何もできないんだよ……
そう思いながらも、おにぎりを頬張った。
すると、身体中に魔力がみなぎる感覚を覚えた。
魔力欠乏状態でなかったら気づかなかったかもしれないけど、明らかにおにぎりを食べたことで、魔力は回復した。
「美味いだろ？　一時間くらいは効果が持つから安心しろ。今度から食事を自動魔力回復効果があるものにしてやる。それで、思いきり戦えるぞ」
何言ってるのこの人？　そんな神がかった食べものなんてあるわけ……そう思ったけど、目の前のおにぎりを見て……あるんだ……と思った。
それからの私は、大活躍できるようになった。
でも、みんなのカイン兄ちゃんの扱いは酷い。
私は本人に聞いた。

「ねえ、カイン兄ちゃんって、なんで言わないの？　自分の実力」
「フィル、俺はな、魔物であれ人であれ、できれば殺したくないんだ。ただし美味しく食べるために必要だったり、仲間を守るために必要だったりすれば、しょうがないから戦うけどな」
「じゃあやっぱり、いつも魔物が少ないのとか罠がないのって、全部カイン兄ちゃんがやってる？」
「まあ、そうだな。美味そうな魔物肉は強いやつが多いから、食材の補給である程度は倒してる。でも、ギースやフィルたちにとって戦いやすそうなのとかは残してるぞ。ただ、そういうのでも、時々は美味そうなやつは狩ってるけどな」
「そっか。ありがとう、カイン兄ちゃん」
「ギースやミルキーはプライドが高いから、このことは言わないようにな」
この人の本当の実力ってどれくらいなんだろう？　そう思ったけど、結局その実力を目の当たりにすることはないまま、カイン兄ちゃんはクランをクビになった。
理由は、私のバフが届かなくなったから。
戦闘を見ることはなかったけど、倍以上のレベルの開きがあったんなら、私がカイン兄ちゃんを高く評価しすぎてただけなのかな？
今は私もレベルが上がり、魔力不足はほとんど解消した。
カイン兄ちゃんの美味しい料理が食べられないのだけは寂しいけど……
いつか、時間のあるときに、カイン兄ちゃんの田舎を訪れてみよう。

あの美味しいおにぎりを食べたいから……

第三話　ギルドマスター

「なんだと？　ドラゴンブレスがSランクダンジョン『絶望の谷』をクリアしただと!?」
王都の冒険者ギルドでギルドマスターの俺――ギルノア・ヴィンセントの声が響いた。
世界で初めてSランクダンジョンが攻略された。
きっと王宮でも大騒ぎになるであろう。
あの小僧どもが、立派になったもんだな。
戦闘職の四人は才能があると思っていたが、ここまで大きく成長するとは思わなかった。
サポートの料理人『カイン』、あいつがきっと鍵なんだろうな。
まあ、あいつがどの程度の実力か、俺には見当がつく。
よく食材用にソロで狩った魔物の皮とか牙とかを、一人で納品しに来ていたからな。
そして、金にするとクランに納めなきゃならないからと、次の探索に必要な魔導具やポーション類と交換していた。
「お前のとこはクランだから、魔導具やポーションはクランの経費で支給されるんだろう？」

「ああ、そうなんだけどさ。俺はソロで動くことが多いから、使う量が半端ないんで、金の管理してるミルキーの視線が痛いんだよ。だから、使う分の一割だけクランの経費で買って、残りはこうして自力で調達してんだよ」
「それにしても結構な量を使うよな。金にすれば、月々金貨五十枚分くらいか？」
「そうだな。一割分をクラン経費で買って金貨五枚分だから、そんなところだ。俺は弱いから道具がなきゃ、何もできないんだよ」
「普通のやつは道具があってもできないから、冒険者は商売として成り立つんだけどな」
「ともかく、マスター。俺としては決してクランを裏切ってるつもりはないけど、ここでソロで狩ってる分を魔導具に交換してるのは内緒で頼むな。俺が不正をしてるように言い出すやつも出てくるかもしれないから」
「ああ。わかったよ。お前の納品は俺が直接受け取るから、必ず俺に渡すようにしろよ？　ギルドの職員から話が漏れる可能性もあるからな」
Sランクダンジョン攻略の件で、俺は国に対して、あいつらへの叙爵の申請を出してやった。
実績を正当に評価するのは大事だ。
こう見えて、俺は王都のギルドマスターであるとともに、ヴィンセント公爵家の次男だからな。
家を継ぐことはないが、この国の冒険者ギルドを纏め、各地で起こる大量の魔物による大暴走――スタンピードなどへの対処を王宮から任されている。

魔物討伐に関しては、国の兵士よりも冒険者の方が優れてるからだ。
カインもやっと伸び伸び行動できるようになるだろう。
貴族になってしまえば、カインがやつらの子守をする必要もないだろうし。
しかし、事態は思わぬ方へ向かう。

「なんだと……」
ギースがカインの叙爵を断ったと連絡があった。
そしてその話は、既に王宮に報告済みで、陛下も承諾したそうだ。
「なぜそうなったんだ？」
俺はこのことを報告しに来た部下に尋ねた。
「料理人カインは、『絶望の谷』最終階層のボス部屋に入っていなかったそうです」
「それじゃあ、あいつらは……カイン抜きで、ダンジョンボスのエンシェントドラゴンを倒したというのか？」
「そういう話ですね。メンバーの誰に聞いても同じ答えですし、別段嘘をついてるようにも思えません。ただ……」
「ただ……なんだ？」
「最終階層に突入してもそう強い敵はいなくて、ボスを倒して最奥のダンジョンコアのある部屋に

入ったら、既に宝箱や転移魔法陣が出現していたとの情報があります」
「それはおかしいな。ここ二百年、新たに攻略されたダンジョンはない。だから、正確な情報とは言えないが、それらは誰かがダンジョンコアに触れたら出てくるはずだし、ダンジョンコアに触れた者は、そのダンジョンのランクに応じたギフトを手に入れるはずだ。ギースはそのギフトを持っているのか？」
「それは確認をしておりませんが、聖剣や秘薬を持ち帰っております。若返りの秘薬を陛下に献上しておりますので間違いないかと」
「ほー、若返りの秘薬を献上するとは、欲の皮が突っ張ったギースにしては張り込んだな？」
「それも裏があるようで……カインの貴族位を辞退したから、本来準男爵となるはずだったギースの爵位が、男爵へと変更されたようです。その交渉を通しやすくする意図があったらしく……」
「なるほどな。準男爵と男爵では恩給も年間で金貨三百枚分も違うから、秘薬の一つや二つ渡したところで十分元は取れるという算段か。ギースらしい小賢しさだな」
「何か対処しますか？」
「陛下が承認したんなら、この話は蒸し返せないが……カインはどうしてるんだ？」
「故郷に帰って食堂を始めるという話です」
カインの故郷は確か国境の村だったな。
畑と牧場しかないような場所だが、そのうち様子を見に行くか。

さすがにあの村にはギルドの支部はないからな。

第四話　奴隷商の街

チュールとともに、俺――カインは故郷を目指して歩いていた。
「ねえカイン。今日は野宿になるの？」
「俺一人ならそれでも構わなかったが、チュールは女の子だからな。次に通る街で泊まろう」
「カイン優しい。身体で払う？」
「大人になってから言え」
「来年で成人。もう大人」
「どう見てもガキだ」
そんな話をしてると、街を囲う壁が見えてきた。
人がいるところにも魔物が出るので、ある程度以上の人口の街では、高い防護壁を張り巡らしているものだ。
街の発展とともに壁は追加されるから、古い街ではバームクーヘンのように壁が何層にも立ち並ぶことになる。

これは領土間の争いが起こったときなどの防衛にも使えるので、新しい壁を作ったときに古い壁を取り壊しはしないのだ。
例えば、王都では王宮に着くまでに七重の壁を越えなければならない。
俺たちが門に到着すると、衛兵が身分証の確認を行っている。
これもまた当たり前の光景だ。
俺は冒険者証を取り出した。
「あ、チュールは身分証なんてないよな？」
「うん」
「衛兵さん。俺は冒険者だが、連れは身分証を持ってないんだ。臨時の入街許可証を発行してもらえるかな？」
「あ、はい。カインさんの冒険者証を確認しました。入街料は白銅貨一枚になります。臨時許可証は、白銅貨五枚です。滞在中に身分証を作られることをお勧めします。それと……獣人ですよね？奴隷ではないんですよね」
「もちろんだ。俺の友達だよ」
「この街では、亜人の方は目立たないようにすることをお勧めします」
「なぜだ？」
「領主様の方針で……亜人の奴隷売買が活発に行われていて、隷属の首輪をしていない亜人はさら

われる危険性が高いので」
「随分物騒な街だな。領主はこの街に住んでるのか？」
「いえ。領主様は今はここにはおられません。代官様がいらっしゃいます」
「わかった。忠告ありがとう。ところで、冒険者ギルドはどっちだ？」
「このまま、まっすぐ中央広場に向かって歩くと、看板が出てます」
俺たちは言われた通りに、まっすぐ道を進んだ。
すると、五分も歩かないうちに事件は起きた。
「おい、その猫人族の女をこっちに寄越しな」
いきなりそんなセリフを吐きながら、いかにもガラの悪そうな太った三人の男が立ちはだかった。
「チュール、知り合いか？」
「こんな、顔面が崩壊したような知り合いはいない。こいつら、オークじゃない？」
「そうか。オークなら解体して肉屋にでも売り飛ばすか？」
俺たちが好きに話していると、三人の男たちがすごんだ。
「何、わけわからんこと言ってんだ。さっさとその女をこっちに渡して消えないと、豚の餌にしちまうぞ？」
「お前ら、オークのくせに養豚してんのか？　共食いは精神衛生上よくないぞ？」
「誰がオークだ。おい構わねえ、さっさとこいつをぶちのめして、猫人族の女を売り飛ばすぞ」

三人の男が殴りかかってきた。
夕方の街中だ。
結構な人が歩いてるのに、誰も止める気配がない。
この街は、どうやら奴隷商が幅を利かせた、どうしようもない街みたいだな。
この程度の雑魚は、倒すだけならどうってことないが、中途半端に済ますと他にもちょっかいを出してくるやつが出てきそうだな。
俺は腰のベルトからフォークを六本取り出して、片手に三本ずつ構えた。
両手で一気に投げる。
三人の両足の甲に一本ずつ突き刺さり、彼らを地面に縫いつけた。
こちらに向かってきていた男たちは、前向きにべちゃっと倒れた。
俺はさらに、六本のフォークを取り出し、今度は両手の掌を地面に張りつけた。
三人はうつ伏せ状態で、両手両足を地面に固定された。
俺は彼らに対して告げる。
「ここで解体されて、肉屋に売られるんでいいんだな？」
「ヒッ、お前、俺らにこんな真似して、無事にこの街から出られると思うなよ」
「おお、この状況でそのセリフが出るとか、どんだけなんだお前ら。このまま他の連中が助けに来てくれるのを待ってやるよ。そいつらが、まだ俺の連れに何かしようとするなら、とことん掃除し

てやる」
「カイン、楽しんでる？」
チュールに問いかけられる。
「いや、怒ってる」
「顔が楽しそう」
「ダンジョンの魔物に比べりゃ、こんなの雑魚だからな。食えそうにないから殺しはしないが、手足の一本は貰ってやろう。まあ、俺は食わないから、それこそ豚の餌にでもするけどな」
俺は脅しのつもりで、わざと三人に聞こえるように言う。
三分もすると、野次馬もだんだん増えてきて、結構な人だかりになった。
そこへ、人垣を押しのけるように、俺たちを襲ってきた連中よりさらに醜く太った豚みたいな男が現れた。
「この街で騒ぎを起こす不届き者はお前か？　さっさとその猫人族を置いて出ていけ」
「おい、お前らは学習能力ってもんがないのか？　この状況でなんでそんな強気なんだ」
「わかってないのはお前だ。この街では亜人は商品以外の何物でもない。隷属の首輪をつけてない猫人族を連れてるお前が悪い」
「俺の連れを渡すつもりはないし、かかってくるならとことん相手をしてやる。手足がなくなっても文句言うなよ？」

立ち読みサンプル
はここまで

俺がそう言うと、豚男の後ろからさらに十人ほどの男たちが出てきた。
全員が武器を手にしている。
この国では法律により、街中での攻撃魔法の使用は禁止されている。やつらはそれを守っているようだ。
だが禁止されているのは、あくまで攻撃魔法だ。
俺は、攻撃魔法は使えない。
俺が使えるのは生活魔法だからな。
十人が一斉に俺とチュールに向かってくる。
「『穴掘り』」
俺は生活魔法の『穴掘り』を発動させた。
俺とチュールの前に、幅二メートル深さ三メートルほどの穴を掘った。
するとどうなるか――
俺たちに向かって武器を振り上げた男どもは、仲良く穴に落ちて、一瞬で片づいた。
「街の道路の真ん中に穴を開けたままじゃ不便だから、埋めなきゃな」
俺はそう言って、魔法の鞄からスコップを取り出し、落ちてる男の上から土をかけはじめた。
わざとだし、ゆっくりめにだけどな。
「お、おい。やめろ。やめてくれ」